



## Slope DRR News Letter 03

2021年8月30日

自主防災組織の活性化による斜面災害減災力の強化事業  
Capacity building of local community for slope disaster risk reduction

JICA Grass Root Program between JAPAN & VIETNAM

### 1. 何とかこぎ着けたキックオフ会議

先のニュースレターでは「キックオフミーティングを開けない。」と記しましたが、去る4月14日(水)に、ラオカイ省 DARD、栗原市役所、JICA ハノイ事務所の3ヶ所を繋いで、リモート版のキックオフ会議を開催出来ました。実質的には様々な工夫を重ねて、プロジェクトは続けておりましたが、けじめである会議で心新たにになりました。

会議では、栗原市市長、JICA 東北所長、JICA ハノイ事務所副所長、ベトナム側ラオカイ省 DARD 副局長、支援機関からベトナム交通省交通科学研究所副所長からのご挨拶を賜り、次いで、日本側3件、JICA ハノイ事務所1件、ラオカイ省 DARD1 件の報告が行われました。ご挨拶と報告は、それぞれ日・ベトナム両国語に翻訳されて提供されました。

その中で、「はじめに」では、この会議開催の経緯が以下のように示されました。

日本・ベトナム国 JICA 草の根技術協力事業（地域活性化特別枠）自主防災組織の活性化による斜面災害減災力の強化事業は、2020年4月から2023年3月の計画で開始いたしました。これに先立ち2020年1月14日には、栗原市・JICA ベトナム事務所・ラオカイ省 DARD ・(株)アドバンテクノロジーによる覚書(M/M)が取り交わされております。当初の計画では、昨年4月に、栗原市においてキックオフ会議を開催する計画でしたが、両国ともにコロナ禍に見舞われ、相互の人的交流は実施できませんでした。しかしながら、工夫を重ねて相互の交流を実施し、遠隔環境下での技術協力の面では多少の進捗がありました。1年遅れで、しかも栗原市・ラオカイ省 DARD ・JICA ハノイ事務所を繋いだ3元での開催となった今回のキックオフ会議は、プロジェクト発足から1年が過ぎ、これまでのプロジェクトの趣旨を再確認し、これまでの進捗を確認し、今後の展開を構想するものです。

会議は、相互の理解をより容易にすることを目指して日本語とベトナム語で実施しました。従って翻訳と通訳に意を注ぎました。これを踏まえて、報告も両国語で作ることに努めました。コロナ禍においては当初の計画は儘ならないことが多く、相互の理解のためには、出来る限りの工夫を重ねることの大事さを痛感しております。この報告集が両国関係者の相互理解の深化に多少なりとも助けになれば嬉しく思います。

(プロジェクトマネージャー 宮城豊彦)



写真(左): 草の根技術協力事業 [MM]サイン文書とプロジェクト日本側主要メンバー 佐藤忠美ジオパーク推進協議会事務局長、高橋正淑栗原市商工観光部長、千葉健司栗原市長、濱崎英作アドバンテクノロジー社長(実施団体)、小林雪治 JICA 東北所長、宮城豊彦プロジェクトマネージャー(写真左から)



写真(左) キックオフ会議の参加状況(ベトナム側)、関係機関(ラオカイ省 DARD 農業農村開発局、公安委員会、サパ郡、バサ郡、省内 3 か所のパイロット地区代表、通訳担当者など。

## 2. 防災の実を上げる工夫としての紙芝居企画

防災とりわけ自主防災力の強化につながる最も基本的な力は、おそらく何処が何故どのように危険なのかを地域の共通認識とすることであり、共同して事に当たることではないかと考えています。日本のようないわゆる防災先進国であっても、ハザードマップの存在は知っていても我が地域の何処が何故どれ程の災害脆弱性を有しているかとなると、その地域での共通理解は結構お粗末な状況にあります。これがベトナムの北部山岳地域となると、更に話は厄介です。ベトナムでは地図を見る習慣があまりなく、地図と言っても等高線が精確に描かれているとは限りません。既存の災害脆弱性の地図が無いわけではありませんが、必ずしも地域住民にまで情報が行き渡ってはいないのが現状です。加えて、UNICEF の関係者から得た話ですが、山岳の少数民族地域においてはベトナム語を話さない住民も少なくないそうです。本プロジェクトのような企画はコロナ禍ということもあり、まるで三重苦のような様相を呈することになってしまいます。せめて、何処がどんな災害脆弱性を持っているかという地域の基盤情報程度は共有情報として持っていたいものです。

そこで、思いついたのが「教室ではベトナム語で学ぶ子供たちに伝え、それを子供たちが親に現地語で話す」アプローチです。恐らく紙芝居は身近な切り口で、子供と親に伝わればとても重要なツールになります。また、この企画を進めることで、私たち自身も学んだことがあります。作品は、パイロット地区毎にその地域の実情を踏まえて作ることとしましたので、地域をより詳しく理解することに繋がりました。また、子供に伝わるようにとの観点は、何が目的の中核なのかを自問自答する機会にもなりました。初めての作品がもうすぐ完成します。